

二つの「送り仮名」

柴田雅生*

一 はじめに

いわゆる「送り仮名」とは、現代においては「語を漢字と仮名を使って表記する際、語（複合語の場合は各複合要素）の末尾の部分を仮名で表す場合の、その仮名の部分」⁽¹⁾との認識が一般的であると思われる。この認識を支えているものが、現行の「送り仮名の付け方」⁽²⁾（昭和四十八年内閣告示、昭和五十六年一部改正）であり、その嚆矢は明治初期にさかのぼる。「送り仮名」の付け方に関して初めて体系的に論じたのは、中根淑『日本文典』（明治九年）の下巻付録「送り仮名法則」であるが、そこにおいては四則を立てて主として読み誤りがないようにするための方策として送り仮名を位置付けている。現行の「送り仮名の付け方」においても、慣用の語を除けば、活用語の活用語尾を送るものと誤読・難読を避けるためのものの二つを挙げて「法則」としている。

ところが、このような「送り仮名」の認識とは異なるもう一つの「送り仮名」が現代にも存在する。漢文における「送り仮名」である。例えば、現行のある高等学校用の国語教科書には次のように記されている。

我_レ読_ム書_ヲ。 我_レ書_ヲ読_ム。

漢字の右横下の「カタカナ」が送り仮名であり、漢字の左横下の「レ」が返り点である。これに「。」と「、」の「句読点」などを加えて、訓点という。（中略）

送り仮名——訓読するために補う活用語尾や助詞などをいい、歴史的仮名遣いを用いて示す。⁽³⁾

漢文における「送り仮名」が助詞などを含むのは、古くは平安初期以降の訓点資料に見られるのと同等であり、「送り仮名」が漢字の訓読により生じたものである以上は、むしろこのような認識の方が本来的であったといえる。また、「送り仮名」という語の用法の中心も、かつては漢文訓読の場で漢字の傍らに小さく付される活用語尾や助詞・助動詞を示す仮名であったと見做される。⁽³⁾しかし、現代においては、このような「送り仮名」は限られた特定の場においてのみ用いられるためか、「送り仮名」の議論においてさほど注目されることがないようである。本来的と考えられている「送り仮名」が一方には存在しながら、何故それとは別の「送り仮名」が存在するに至ったのか。両者の関係を今一度改めてみる必要があると思われる。本稿では、いわゆる通常の「送り仮名」（以下、〈送り仮名〉とする）と漢文訓読における「送り仮名」（以下、〈付訓〉⁽⁴⁾と称する）の関わりについて、問題点の整理を試みてみたいと思う。

二 「送り仮名」の起源

最初に確認しておきたいのは、通常の〈送り仮名〉が漢文訓読の「送り仮名」に由来している（もしくは由来していると認識されている）ことである。いわば自明とも考えられることを最初に明示したのが、文部省図書局国語課「従来の送り仮名法に関する調査研究（用例編）」（未定稿）である。

発生的に考察すれば、送り仮名が漢文の訓読と密接な関係にあることを察知し得るのであるが、漢字の音・訓、特に字訓の表記に送り仮名発生の根本があるやうである。即ち意字としての漢字のみでは、字訓即ち国語を十分に表現出来ない場合があり、又違つた語に訓み誤られる恐れがあるところから、漢字に仮名を添へて、明確に国語を表記し、誤読を防がうとしたところに、送り仮名発生の契機が存するものと思はれる。

漢文訓読との関係を指摘しながら、特に字訓の表記に一般化して、「送り仮名」発生の契機を誤読をふせぐところに位置付けている。一方、第二次大戦後の国立国語研究所編『送り仮名法資料集』（一九五二年四月、秀英出版）は、送り仮名の問題が生ずる要因として五項を挙げ、その二として「国文の表記そも／＼の母体が漢文であり、現行のものも漢文書き下し体から出ていること。」（送り仮名問題発生の基盤の項）と解説する。「母体」がどのような意味合いであるのか判然としないが、送り仮名だけでなく、日本語の表記全体が漢文を「母体」としている、という説明は、続く「送り仮名がまち／＼でも、漢字に慣れた者ならば読み取ることが出来る。」との言及から、漢文訓読との分かちがたい関係を示

している。

右のような明示的な言及を待つまでもなく、明治以来の送り仮名法の資料においては、漢字を主とし、仮名を従とする考え方が主流であり、「送り仮名」という名称もそれに由来すると見做される。送り仮名と漢文訓読の関係は否定しがたいものといえる。

しかし、この関係はあくまで起源に関するものであり、明治以降の両者の性格は、実際的にはかなり異なっていると見做される。例えば、次はそれを明確に示した言及といえよう。

（略）まづ根本的態度として、漢字尊重或ひは漢字本位の考へ方を捨て、漢字と仮名を同等に見る立場をとりたい。即ち国語の語彙を漢字と仮名とで書き表はす場合、漢字を意字として用ゐるは勿論、仮名と同様に音節を表はす文字としても取り扱ふのである。さうしてどの音節に漢字を当て、どの音節を仮名で表記するかを、国語の本質に照らして定めるのであつて（文部省図書局国語課『従来の送り仮名法に関する調査研究（未定稿）』第一篇、従来の送り仮名法批判）

このような見方は、「送り仮名」についての議論の行き詰まりを打破するために生み出されたものであるかもしれない。けれども、これまでの漢字重視の考え方とは別の方向性を示し、「いかによむか」ではなく「いかに書き表すか」という観点を打ち出したことは注目に値する。ともかくも、いわゆる国語国字問題において、送り仮名の議論が生じたのも、漢字と仮名を交えて表記するという「普通文」（或いは漢字仮名混じり文）のスタイル故のことであり、そのような表記スタイルを選択することによって議論の発生は決定づけられたものといえる。その点からすれば、漢文訓読の「送り仮名」とは区別して議論する必要があったのかもしれない。

送り仮名がどのように議論の俎上に乗せられたのかについては、別途精査する必要があるが、文部省図書局国語課の未定稿が明示的に示すまでもなく、それ以前の実態をなにかの形で踏まえていると考えられる。国語調査委員会編『送り仮名法』（明治四〇年三月）の冒頭の例言にも示唆する。

祝詞宣命ヨリ、日記類、軍記類、現今ノ普通文ヲ通觀スルニ、時代ニヨリ、使用者ニヨリ、送假名ノ方法ハ毫モ一定セルモノニアラズ。
(復刻による)

このほかにも同様の言及は多いが、概してその指摘は統一性の無さに集中する。しかし、具体的に実態を示したものは、国立国語研究所編『送り仮名法資料集』や吉田澄夫・井之口有一編『明治以降の国字問題諸案集成』を見てもさほど多くなかったようであり、わずかに佐藤仁之助『新撰送仮字法』（一八九九年十二月）や文部省図書局国語課「従来の送り仮名法に関する調査研究（用例編）」（未定稿）がある程度である。前者においては例証に源氏物語・平家物語・保元物語・太平記などを用い、後者においては、上代から近代に至るまでの二十五資料における送り仮名を調査し、議論の材料として提供しようとしている。^⑦ なかには、内閣官報局編纂『送り仮名法』（明治二十七年刊）のように、「送り仮名法ノ応用」として、「第一 歌（和歌） 第二 和文（具体的には、大鏡・土佐日記・徒然草） 第三 詩（漢詩） 第四 漢文」を送り仮名の具体的姿として例示しているものもあるが、一部を除き日本語の表記の歴史が具体的に顧みられることは少なかった。近年では、田島清司氏が精力的に調査されているが、主として現行の送り仮名との比較対照であり、その内実はかならずしも明確にはなっていないように思われる。

三 「送り仮名」と付訓

前節に見たように、送り仮名制定に至るまでの議論には、具体的な実例乃至前例を踏まえたと言明しているものは少ないのであるが、たとえばそれが無秩序なものであっても現実的な送り仮名の実態から全く離れたところで送り仮名についての議論が展開されていたともまた考えにくい。それぞれの文章の位置付けにはまだ検討の余地を残すけれども、周知の如く、明治初期においてもさまざまな文章において漢字仮名交じり文は用いられていた。例えば、

吾輩日常二三朋友ノ盍簪ニ於テ偶當時治亂盛衰ノ故政治得失ノ跡ナト凡テ世故ニ就テ談論爰ニ及フ時ハ動モスレハカノ歐洲諸國ト比較スルヲノ多カル中ニ終ニハ彼ノ文明ヲ羨ミ我カ不開化ヲ歎シ果テタハ人民ノ愚如何トモスルナシト云フニ歸シテ亦歎歎長息ニ堪サル者アリ

（『明六雜誌』^⑧ 第一号・西周「洋字ヲ以

テ國語ヲ書スルノ論」、明治七年三月）
の如きであり、英学資料などの日本語表記に関する説明においても、漢文と並んで漢字仮名交じり文が登場する。また、いわゆる送り仮名法を説く書物の序においては、通用の表記スタイルが概ね漢字仮名交じりであることを指摘している。

それでは、当時の漢文のスタイルはどのようなものであったのだろうか。後に示す例を俟つまでもなく、その姿は概ね現行のそれとさほど異ならないものであったと思われる。また、漢文における「送り仮名」については、少々遡るが、日尾荆山『訓點復古』^⑩（天保六年序）において、サテ後一世ニ至テハ、袁古刀ノ朱點ヲ附テハ讀マズ、片假字ヲ以テ、

送假字^{オクリガナ} 俗ニ云ス、一二、上中下、甲乙、等ノ字ニテ、返リ讀ノ符サヘ
附タレハ（下略）
（乾九ウ・「袁古刀點」の条）

と記され、さほど現行の認識と差が認められない。ほぼ一定のものと見做されていたといつてよいであろう。となれば、問題は「送り仮名」の議論において、漢文が起源としての関わり以外にどのような「送り仮名」に結び付けられていたかということになる。これについては、漢文の実例を示す内閣官報局編纂『送仮名法』（明治二十七年刊）を元に考察を加えてみようと思う。

同書では、「送假名法ノ應用」として「本書ニ於テハ讀者ヲシテ成ルヘク十分に送假名ノ實用ヲ辨知セシメ原則ノ運用上迷誤差謬ナカラシメンカタメ左ニ少シク和漢ノ文章及詩歌ヲ採録シ以テ送假名法ノ實用如何ヲ示ス」として、四分類して具体例を挙げている。

まず、「第一 歌」では古今集・新古今集などの和歌を仮名にて示し、その後に漢字仮名交じりにした例を挙げる。

なつはつる、あふきと、あきのしらつゆと、いつれかさきに、おかんとすらん

之ヲ眞假兩字ノ混合體ニテ寫ストキハ正ニ左ノ如シ

夏終つる^{なつは} 扇^{あふき}と秋^{あき}の白露^{しらつゆ}と孰^{いづれ}か先に置^おかんとすらん

（注記記号を省略し、変体仮名は現行の字体に直した）

「眞假兩字ノ混合體」は単に「混合體」とも、あるいは「假名交り體」ともする。続く「第二 和文」においては、「左ニ和文二三ヲ抄出シ本書所定ノ原則ニ從ヒテ之ヲ寫シ以テ送假名法應用ノ一助トス」として、大鏡・土佐日記・徒然草の一節をそれぞれ掲げる。

以上は「和」の例文として、他の送り仮名法を説くものとさほど隔た

りがないものと考えられるが、「漢」の文章の実例を示すところが他には見られない特色である。「第四 漢文」では次の如き例を挙げる。

孟子梁惠王章句上

梁惠王曰。寡人之於國也盡心焉耳矣。河内凶則移其民於河東。移其粟於河内。河東凶亦然。察鄰國之政。無如寡人之用心者。鄰國之民不加少。寡人之民不加多何也。（下略）

右ヲ眞假兩字ノ混合體ニ寫セハ即チ左ノ如シ

梁ノ惠王曰ク。寡人ノ國ニ於ケルヤ心ヲ盡スノミナリ。河内凶ナレハ則チ其民ヲ河東ニ移シ。其粟ヲ河内ニ移ス。河東凶ナルモ亦然リ。鄰國ノ政ヲ察ルニ。寡人ノ心ヲ用フルカ如クナル者ナキニ。鄰國ノ民

少キヲ加ヘス。寡人ノ民多キヲ加ヘサルハ何ソヤ。（下略）

「第三 詩」においても、具体的説明は無いものの、同じ体裁で漢詩とその漢字仮名交じり文が並べられている。いづれにしても、「眞假兩字ノ混合體」という説明は「第一 歌」と同様であって、漢文と漢字仮名交じり文の併記は、「第一 歌」における仮名文と漢字仮名交じり文のそれと対応するものである。「第二 和文」と「第三 詩」は説明がないので判然としないが、当該部分冒頭に記すように、この『送假名法』においては、和漢はほぼ同一の枠内に捉えられるべきものとして扱われているといえよう。

しかし、これらの例文において、漢文の「送り仮名」（付訓）が和文のそれ（送り仮名）と同等のものであるかという点、若干の疑念が残る。確かに、平安時代などの訓点資料に〈付訓〉としてしばしば見られる語全体の訓や語頭の数音節を示すものは認められない。その点においては、漢文訓読の結果として漢文に記される訓点の姿も徐々に変化してきたといえよう。細かな検証はこれからであるが、明治初期の漢文資料におけ

る付訓の姿は、概ね語尾を示すものに限られるようである。

項羽曰。吾聞秦軍圍趙王鉅鹿。疾引兵渡河。楚擊其外。趙應其内。破秦軍必矣。宋義曰。不然。夫搏牛之蝱。不可破蟻蝨。

(明治二年刊『増訂史記評林』卷七)

少し遡る別の資料では、語尾以外に語全体の訓を記すものも見られるが、大部分は語尾に関わる〈付訓〉であり、大勢は語尾もしくは助詞等を示す仮名に傾いていたと考えられる。

元鳳元年春長公主共養勞苦復以藍田益長公主湯沐邑泗水戴王前薨以母嗣國除後宮有遺腹子煖

(明暦刊『漢書評林』卷七)

とすれば、漢文訓読における〈付訓〉も〈送り仮名〉と同等のものとして考えられる可能性は十分あったと思われる。それが、この『送仮名法』に示された実例にも反映したとも考えられる。

ところが、先の挙例中の「鄰國ノ政ヲ察ルニ。」のような「送り仮名」を見るに、やはり和文の〈送り仮名〉とは異質のものと思われる。ここでは恐らく「(み)ルニ」と訓するのであるが、このような訓をただちに想起しうるかについては、いささかの疑問を感じる。例えば、『孟子』のこの部分について、現行の漢和辞典においてはカンガエルなどの訓も示されており、また、常用音訓であるサッスルというよみにしても、次のような用例を見るに必ずしも否定しうるものとも思われない。

献ませう(廿章九) 信られません(廿章卅一) 御存が有ません(廿章卅七) 決て(廿一章八) 存ます(廿一章十) 談付ましては(廿一章十二)

E・サトウ『春秋雜誌会話篇(会話篇 第三部)』(明治初年刊) ここではもっぱら一字漢語サ変に限られるが、音読の漢字に対するこの

二つの「送り仮名」

柴田雅生

ような「送り仮名」は必ずしもこの時期から始まったものではない。もちろん現行の字書掲載の音訓との対比には無理があるけれども、和文の〈送り仮名〉との間にはやはりなにがしかの違いを認めてよいように思われる。それは、つまるところ、前節において文部省図書局国語課『従来の送り仮名法に関する調査研究(未定稿)』を挙げて言及した、「いかによむか」と「いかに書き表すか」との差異ということになる。漢文訓読が元の漢文の文字を生かしながらよむスタイルをとる以上は、漢字と訓との間には多少なりともゆるやかな結び付きを認めざるを得ない。従って、〈付訓〉にもさまざまなスタイルが必要となった。それが、書くという場においてはやや固定的な結び付きをもつものとして、〈送り仮名〉はある一定のスタイルをもつもの、そして一定であるべきものの認識が付加されるようになっていった。形態上は似通ったスタイルを持ちながらも、その内実は異質のものであったと考えられるのである。

「送り仮名」という名称に関わる〈付訓〉と〈送り仮名〉の歴史的関係も、次のように整理できる。起源としては漢文を訓み下す際に備忘のために加えられた〈付訓〉としての「送り仮名」が、変体漢文や漢字仮名交じり文において漢字では表記しえない部分を補うものとして取り入れられ、次第に漢字と仮名との混合のスタイルを定着させていった。その際、特に活用語の語尾を如何に送るかが問題視され、活用語尾にあたる部分の仮名を指して主として「捨て仮名」という呼称が用いられた。一方、漢文訓読の場においては〈付訓〉全体を指して「送り仮名」と称していたが、次第に語尾や助詞などに固定化していったため、「捨て仮名」との形態上の境目は希薄になっていった。近代に入り、「送り仮名」の議論が高まった時に、近世に多くの用例が見られる「捨て仮名」ではなく「送り仮名」という名称がもっぱら用いられたのは、菊地氏が指摘

されるように、「捨て仮名」のもつ俗な響きを嫌ったためと考えられるが、いずれにせよ、この交替が漢文の〈付訓〉から和文の〈送り仮名〉への展開、すなわち「送り仮名」が「よむための仮名」から「書くための仮名」へと転じていった契機になったと思われる。さらには、いわゆる普通文の普及や漢字制限がこの交替の後押しをした。先に示した『送仮名法』の著者が両者の違いをどの程度具体的に認識していたかは不明であるが、いみじくも〈送り仮名〉と〈付訓〉の関係についての当時の意識の一端、つまりは両者はその内実はさし措いて一括りにしうる対象であるとの認識を示したものとは言えないであろうか。しかし、そのような認識も、「普通文」として「いかに書き表すか」という時代の要請の前に次第に影が薄くなり、〈付訓〉としての「送り仮名」も一般的ではなくなっていったと考えられる。

四 終わりに

残された大きな問題は、「送り仮名」において、「よむこと」と「書くこと」がどのように関わり合ってきたかということである。具体的には、〈付訓〉と〈送り仮名〉の関係を、歴史的に洗い直すということである。これまで、「送り仮名（または捨て仮名）」の研究において、いわゆる変体漢文における〈付訓〉もその対象とされてきたが、これは「書くこと」の反映として見做しうるからであり、一定の成果もあげることができた。しかし、峰岸明氏が高山寺本『史記』において指摘されたように、漢文訓読資料においても〈付訓〉がある程度一定のものと認められるのであれば、「よむこと」と「書くこと」は早い時期からさほど隔たったものではなかったと考えることができる。確かに、漢文訓読の世界も学

問的成熟に伴い訓の固定化が進み、付訓のスタイルも一定になっていったことは想像に難くない。けれども、それでも漢文訓読においては原漢文の漢字を離れるわけにはいかず、日本語を漢字交じりで表記した文章とはなにがしかの違いを想定して考える必要がある。「いかによむか」と「いかに書き表すか」という二つのベクトルは、別段近代に入ってから関わり合うようになったわけではない。両者は、漢字を用いて日本語を書き記すという行為が生じて以来の、言わば長年の懸案である。まずは、そのような視点を明確に据えた上で、幅広い時代にわたって資料を洗い直すことが求められる。そして、そこでは、全訓付訓（または振り仮名）の問題も絡めて整理・検討する必要がある。

また、「送り仮名」の議論において何故助詞が対象に含まなかったのかについてもあまり詳しい検討が加えられないままである。「捨て仮名」としては「うごく詞」⁽¹⁸⁾に焦点が当てられていたとはいえ、ほとんど顧みられることなく議論の場から消えていった。漢文とは語序の入れ替わる日本語文においては自明のこととして扱われたのかもしれないが、文法的把握の問題としても追及すべきものと思われる。

注

(1) 佐藤喜代治編『漢字大百科事典』（一九九六年一月、明治書院）の「送り仮名」の項（安部清哉氏執筆）。

(2) 『高等学校 改訂版 国語Ⅰ』（一九九八年二月、第一学習社）による。同書は、さらに、

(1) 活用語は、活用語尾を送る。(2) 副詞・助動詞などは、最後の一字を送る。(3) 接続詞・前置詞などは最後の一字を送る。(4) 一字を重ねて訓読する場合には、右下に「こ」をつける。(5) 会話・引用などの終わりには「ト」を送る。

などと詳細に解説を加えている（但し書き、および用例は省略）。なお、現代の漢文の訓点では、振り仮名に通常平仮名を用いるが、このように送り仮名と振り仮名を分

けて記すようになったのは、近時とのことである（『国語学大辞典』『送り仮名』の項を参照）。

(3) 菊地圭介「おくりがな」「すてがな」の語史（『語文』九四、一九九六年三月）。

(4) 厳密には、ヲコト点等も含めて訓点とすべきであるが、便宜的に付訓としてとりまとめた。

(5) 実物は未見。三宅武郎編『おくりがな法資料集』（一九六二年五月、明治書院）によれば、①宣命、②祝詞、③白氏文集訓点本、④打聞集、⑤三宝絵詞、⑥太平記、⑦万葉集代匠記、⑧日本霊異記、⑨古事記伝、⑩南総里見八犬伝、⑪春色梅児誉美、⑫小説神髓、⑬雁、⑭明暗など、計二十五作品についての調査報告である。同資料集は⑤⑭のみ掲載。なお、以下、この報告書の引用は同書による。

(6) 吉田澄夫・井之口有一編『明治以降の国字問題諸案集成』（一九六二年七月、風間書房）収録。

(7) 注5に同じ。

(8) 「近世語学書『かたこと』の表記法」（『九州大谷研究紀要』八号、一九八一年一月）「送り仮名表記の諸相——梅沢本古本説話集と打聞集——」（同一〇号、一九八四年四月）など。

(9) 『復刻版明六雑誌第一号』『第二〇号』（一九九八年五月、大空社）による。

(10) 勉誠社文庫による。

(11) 汲古書院刊の和刻本正史による。

(12) 汲古書院刊の和刻本正史による。この資料においては、この他にも、「郷」^{（ふかし）}「日」^{（ひ）}（巻四）のように語頭の首節を示す「付訓」が、僅かではあるが認められる。

(13) 松村明『増補 江戸語東京語の研究』（一九九八年九月、東京堂）所収の影印による。『会話篇』のような典型例ではないが、中古の訓点資料から多くの類例が認められる。例えば、「生」^{（なま）}（興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝承徳三年点・巻七・255）

「感」^{（かみ）}（神田本白氏文集天永四年天・巻三・109）など。

(15) 注3に同じ。

(16) 山本秀人氏は、「院政・鎌倉時代の片仮名文における捨仮名の機能について——和化漢文における附訓法との比較より——」（『福岡教育大学紀要』第四〇号第一分冊、一九九一年）において、片仮名文と和化漢文（変体漢文）の「捨仮名」が共に助詞・助動詞を伴わないことを示す、一種の格表示機能を有することを示された。

(17) 峰岸明氏は「高山寺藏史記点本の加減態度について」（『高山寺古訓点資料第一』（一九八〇年二月、東京大学出版会）。後に『平安時代古記録の国語学的研究』（一九八六年二月、東京大学出版会）に所収）において、高山寺本『史記』に見える完全付

訓・部分付訓・無訓を調査され、漢文の読解においても、漢字とその定訓との対応関係を背景に持つことによってこれらの付訓が成り立つものであることを示された。

(18) 石川雅望『ねざめのすさび』三の巻に「うごく詞にはみなすてがなをせるが、いしへの法なり。」とある。

付記 本稿は、平成十年度明星大学特別研究助成費による成果の一部である。